

中国北方少数民族のシャマン教の現状と研究動向

サ
色
音[※]

シャマニズムの現象は世界の各民族に広く展開している。アジアではシベリア、中国、朝鮮、日本、そして東南アジア諸地域で盛んである。現在、中国の55の少数民族の中にはダウール族、オロチョン族、エベンキ族、ウイグル族、満族、朝鮮族、ヘジェ（赫哲）族、シボ族及びモンゴル族などのようにシャマン教を信じているものもいる。以下、中国北方少数民族のシャマン教の現状と研究動向について述べる。

一、ダウール族のシャマン教

ダウール語ではシャマンに男女差別による呼称の差異はなく、総てヤタカン或はヤダカンである。ダウール族シャマン教の固有の諸神の①テンゲル・バリカン（天の神）は最高神である。テンゲル・バリカンはアチャ・テンゲル（父の天）、ダル・カト（皇女の天）、ノトリ・ノヤン（役人の天）などから成り立っている。この神には牛又は豚を殺して供える。大災害にあうと九頭の牛を殺して供える場合もある。②ボゴル・バリカンは24個の主神から成り立っている。この神には豚肉を供える。③ホレリ・バリカンは17個の神を含み、58種の生物から成り立っている。この神には牛と馬を供える。祭祀の際には男女それぞれ九人が踊りを踊って主神に酒とタバコを献上する。④オジョル・バリカンは祖先神である。ダウール族はハラ（部族）とモホン（氏族）を単位にこの神を祀る。オジョル・バリカンの偶像のほとんどは部族の死んだ女性の祖先であり、偶像そのものは一種の布で作った人形である。この神に酒と豚肉を供えるのが普通である。その外、ダウール族シャマン教の神様にはジャチ・バリカン（畜類の神）、バイナチャ（山の神）、ピリク・バリカン（川の

神）などがある。

ダウール族シャマン教の行事にはジェシン、イリテン、オミナの三種がある。その中ではオミナ祭が一番隆盛である。オミナ祭を挙行するときにトルという竿木を立て、竿木にハデク（吉祥を象徴する白い布）を結ぶ。オミナ祭は三年に1回行う。普通は旧暦の5月から6月の間に行い、期間は3日間である。シャマンが司会する。祭祀の際には村の境界にシュリングという小屋を立てる。小屋がけの中には2本の竿木を並べて立てるが、それを普通ゲル・トル（家の柱）と呼ぶ。オミナ祭は毎日午前、午後、夜の三段階に分けて行う。テンゲルを祭祀する時には必ず大門の外に一足の靴を掛ける。そして大門をしっかりと閉めて他人の立入を禁止する。その元来の意味はよその家の亡霊からの侵略を防備するということである。シャマンが他人の病気を治療する時には、一挺の大斧と一挺の小斧を縄でつなぐ。シャマンは一方の手で斧の柄をにぎりしめて、それから病人の家族の供奉している諸神の名を順番に呼び上げる。病気の原因としての悪神の名を呼び上げる毎に斧は軽く感じられるという。ダウール語では、専門的に子供の病気を治療する女シャマンをオタチと呼び、骨折・できものなどを治療するシャマンをバラチと呼び、専門的にト占・鍼治療をしている男シャマンをドインチ、専門的に助産するシャマンをバレシンとそれぞれ区別して呼ぶ。

ダウール族シャマンの祭具には、サムチクという神衣（サムチクのすそには36枚の小さな鏡を付けている）、ホントルという太鼓、デルボルという扇子及び神帽などがある。

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科研究生

二、オロチョン族のシャマン教

オロチョン族のシャマンには大シャマンと小シャマンの二種があり、大シャマンはセブシャマンと称し、小シャマンはニチグンシャマンと呼ばれている。オロチョン族シャマン教における諸神の①デェルチャは太陽の神である。正月はこの神を祀る。②ベガは月の神である。正月の15日の夜この神を祀る。③オロンは星の神である。大晦日の夜この神を祀る。④バイナチャは山の神である。普通、節供や狩猟の時この神を祀る。⑤トオ・ポリカン火の神である。毎年正月の1日の朝この神を祀る。その他、オロチョン族シャマン教の諸神にはゲンチョルアディルという風の神、アルディダリという雷の神、チョコカという草の神などがある。

オロチョン族のシャマン行事にはホジョル祭、ジャチ・ダアレ祭、ボウム祭、オクチョグ祭などがあり、ジャチ・ダアレは狩猟の神、ボウムは治病の神、オクチョクは産神である。ホジョルは黒樺材の木偶、長さ五寸、口にノロジカの血を塗り、祭祀の時に供物として使う。

オロチョン族のシャマンをホコンシャマン（氏族シャマン）とデルクシャマン（遊行シャマン）と分類する場合もあり、男性シャマンをニルシャマンと呼び、女性シャマンをアシシャマンと呼ぶ。シャマンの祭具には、神帽、神衣などがある。神衣はノロジカの皮衣であり、前面に鏡三十六面、背面に大鏡六面を結び付け、腰に鈴四十二個を結び付け垂れさせる。

三、満族のシャマン教

満族のシャマンには大シャマンと家シャマンの二種があって、大シャマンはシャマン行事を行うとき恍惚状態（エクスタシー）に入られるが、家シャマンは太鼓を叩いたり踊りを踊るだけである。満族の有名なシャマンニシヤンについての物語りがある。その物語によると満族のシャマン行事のプロセスは次の通りである。①まず神様を迎える請神行事から始め、この請神の段階にシャマンが恍惚状態にはいる。初めに主シャマンを中心として助シャマンが左右後方に立ち、主シャマンの請

神歌につれて合唱しつつ太鼓を打つということを繰り返す。その中に主シャマンが恍惚状態にはいるのである。②ト占治病はシャマン行事の中心である。疾病が治癒したことの明白な証拠としてシャマンは病人やその周囲の人たちに対して虫・糸などの何らかのものを示す。③送神行事とは迎えてきた神様を送ることである。この段階でシャマンは恍惚状態から回復する。満族シャマン教行事には流血祭と無血祭の二種があって、流血祭では主として豚と鶏などを殺してその肉と血を神様に供える。無血祭では主に麺類の食物などを神様に供える。満族のシャマンは病気の治療の外に死者の靈魂を冥土に送り、同時にその靈魂を管理することなどを行う。シャマンの祭具には、神衣や円形の単面鼓などがある。

四、シボ族のシャマン教

シボ族のシャマンにはイレトシャマンとプトシャマンの二種があり、「上梯子（刀の梯子を昇る通過儀礼）を済ませたシャマンをイレト（イレトは顕著という意味）シャマンと呼び、「上刀梯」できなかったシャマンをプトシャマン（不顕著という意味）と呼ぶ。「上刀梯」はシボ族シャマン行事の重要な特徴である。刀の梯子の段数は一般的に13段、あるいは、22段であり、一番高いのは49段である。シボ語で刀の梯子に上る儀式をチャグルと呼び、「上刀梯」の儀式は夜間に挙行する。上刀梯はシボ族新シャマンの重要な入巫条件であり、刀の梯子を順調に昇り終えると師医のシャマンは新シャマンにトゥリ（かがみ）という祭具を与える。そのトゥリを獲得すると新シャマンはイレトシャマンと呼称され、以後自分で独立的に宗教活動を行う資格を取得する。シボ族のシャマンには神帽、神衣のほかにジダ（矛という意味）という祭具があり、長さは大体二尺である。

近年、中国の新疆自治区の察布查爾シボ族自治県では『シャマンの歌』というシャマン教の呪文が発見され、1985年以後シャマニズム研究の重要資料として利用されるようになった。その原文は満文で、規格は18cm×9cm、計二冊である。今、新疆自治区の少数民族古籍弁公室に収蔵されてい

る。この外、同じ察布查爾シボ自治県の金泉鎮という村から三幅のシャマン神像が発見された。

五、モンゴル族のシャマン教

モンゴル族は一般に男性シャマンをボー、ブゲと呼び、それに対して女性シャマンをイドガン、オドグンと呼ぶ。モンゴル族のシャマン教の靈魂観の中心は人間に三つの靈魂があるということである。

モンゴル族シャマン教の諸神の中ではテンゲル(天)は最高神である。シャマン教の崇拜対象としてのテンゲルは99個あって、その99個のテンゲルには各々の分業がある。例えば、マニハンテンゲル(またアンギンテンゲルとも呼ぶ)は狩獵神であり、獲物を管理する。ガリンテンゲルは火を、ジャーガチテンゲルは牧畜を、ダイチンテンゲルは戦争を、ハンハラテンゲルは病気を、チャヒルガンテンゲルは雷を、ピサマンテンゲルは財産をそれぞれ管理する。99個のテンゲルは二つの相反目する陣営に分かれ、西方の55個のテンゲルは善テンゲルであり、東方の44個のテンゲルは悪テンゲルである。

新しくシャマンとなるべき者は多く青年期に於いて巫病(精神錯乱又は癲癇病など)に陥る。その外イスンダバ(9個の関)という入巫のための加入儀礼がある。イスンダバとは火で焼けた9枚の押切用の刀をはだして踏んで通ることである。イスンダバを順調に通過すればシャマンの資格にかなう。

モンゴル族シャマン教の主な行事は以下の通りである。①タブンサリン・タヒル(即ち5月祭)は毎年5月の家畜の肥えふとっている季節を選んでタブンサリン・タヒル(即ち5月祭)を行う。タブンサリン・タヒルでは主に家畜の繁盛などを祝い祈る。②テンゲル祭とガジヤル祭は天の神様と地の神様を祀ることである。モンゴル族シャマン教はテンゲル(天)に対して特別の崇拜を表し、テンゲルは自然界の男性的根源の人格化と思惟され、ガジヤル(地)は女性的根源の人格化と考えられている。モンゴル族はテンゲルに万物を作る力があるとして造物主的観念と結びつけ、そのテ

ンゲルが人間のイチク(父)であると信じている。それに対して土地そのものを母と呼んでいた。マルコ・ポーロの旅行記には「彼等がその地の神をナティガイ(natigay)と呼んでいる。母の神である」と記録されている。③病氣治療の儀式はモンゴル族シャマン教行事の一番重要な部分である。モンゴル族シャマン教の起源はその医術的機能と関連を有する。病氣治療のプロセスは④羊を殺してテンゲルを供養する。筆者の調査によるとシャマンは病人のために羊を殺してテンゲルを供養する時に必ず白い色の羊を選ぶ。なぜならば白い色は吉祥の象徴だからである。シャマンはテンゲルに向ってその羊の長所をほめたたえる。⑤ソニスダグダフ(靈魂を招く)儀式はシャマンがドアに向って太鼓を叩いたり、シャマンの神歌を歌ったり病人のためにソニスを招くことである。モンゴル族シャマン教では人間にソニスという靈魂があって、そのソニスが身体から離れると病気になるという信仰がある。だから治病する時にはまずその病人の離れたソニス(モンゴル語ではソニスジェラフという)を招き戻すのである。⑥シャマンが踊りを踊ってエクスタシーにはいる。エクスタシーそのものをモンゴル語でボゲオルシフという。ボゲオルシフとは神様がシャマンの身体にはいったという意味である。⑦シャマンの身体にはいった神様をフルオンゴン(墓)まで送る。なぜならば悪霊としてのソニスは墓に止まっていると信じられているからである。シャマンの治病儀式にはジダシンゲフという儀式がある。シャマンはジダ(矛)を自身の腹に刺して病人や周囲の人々に見せる。ジェリク・アマラグルフという儀式がある。ジェリクとは草で作った人形である。シャマンの治病儀礼にはいろいろなタブーがある。筆者の調査によるとシャマンが羊を殺してテンゲルを供養する時に必ず羊の骨の数や腸の長さや内臓の位置などを正しく数えてテンゲルに告げ、間違えるとテンゲルの神が怒るというタブーがある。そして完全に白い色の羊を選ばなければならず、ほかの色の毛が1本でも混じってはいけない。筆者がタスというシャマンにあってシャマン教のタ

ブーについて問うと、彼はホルチンモンゴル地方では大オングン（偶像）と小オングンを縄でつなげなければならないというタブーがあると答えた。なぜならばそうしないと小オングンは逃げるからである。④オボ祭りもモンゴル族シャAMAN行事の重要な内容である。オボとは小高い丘の頂きなどの場所に石と土で積み上げられた塔のようなものである。その構造は壘石または版築の基部と、これに束ねてさした柳の枝（モンゴル語でボルガスという）、ならびに1本の竿木の三要素から成り立っている。オボの頂に普通さまざまな色のひもをつける。オボ祭りは毎年一度行なわれる。普通は春または秋で家畜の肥えふとっている季節を選んで行く。オボ祭りの初めに主宰する人がまず手に供物を持ちあげてラッパを吹いたりドラを鳴らしたりする。それから汚れのない馬又は羊を献上し、ごちそうを散らして風水地の神様を祀りすべてが限りなく進歩するとか、世にときめき富貴をきわめるとか、家計が成功するようになどと祈り、讃歌を歌って衷心を表わして神様の保護を祈る。オボ祭りの方式は酒祭、血祭、火祭の三種類がある。

モンゴル族シャAMAN教の主な崇拜対象は天と地の外に、オーラ（山）、ガラ（火）、オド（星）、オジョルデグト（祖先）、オンゴン（偶像）などがある。オンゴンの種類には木と石で作ったものあれば、毛氈で作ったものもあれば、銅と銀で作ったものもある。シャAMANの祭具にはオロガイ・マラガイ（神帽）、アラクデェル（神衣）、イストゥリ（9個の鏡）、タラヒンゲルゲ（単面太鼓）、ジダ（茅）、ホンホタショル（鈴鞭）等がある。

明末から清初にかけてモンゴル地方にラマ教の勢力が確立するにつれてモンゴル族のシャAMANはハラジョグンボゲ（黒シャAMAN）とチャガンジョグンボゲ（白シャAMAN）の二つの宗派に分裂した。そのほか、ライチンという巫者がラマ教とシャAMAN教を習合して宗教活動を行ってきた。伝承の方式から見るとモンゴル族のシャAMANにはジャルガムルボゲ（世襲シャAMAN）とトゴムルボゲ（非世

襲シャAMAN）の二種があるが、ジャルガムルボゲは圧倒的に多い。

六、エベンキ族のシャAMAN教

エベンキ族のシャAMANには最初は氏族シャAMANと家族シャAMANの二種があって、そののちに遊行シャAMANも出現した。フルンボイル盟のムリグル川地方のエベンキ族のシャAMAN行事にはオミナリンという祭典があり、その祭典は毎年4月と5月の間に挙行され、期間は3ヵ月である。エベンキ族のシャAMANはオミナリン祭典を行う時にシャAMAN教が最初に興った森林の象徴としてモンゴルゲル（蒙古包）のそばに120本の木を立てる。

エベンキ族のシャAMANには詳細な分業がある。例えば、シブク神は祖先神であり、ショリ神は病気の神であり、オメ神は子供への保護神である。その外、アルン神はトナカイの保護神である。エベンキ族の子供たちは病気にかかった時にはオメ神を祀る。そして必ず黒い色のトナカイと白い色のトナカイをそれぞれ一匹供養しなければならない。黒い色のはシャAMANの分、白い色のはオメ神の分ということである。供養したとなくいの頭や心臓などを小屋掛けして風葬する。シャAMANの偶像には熊の皮、チンチラの皮などがあり、祭具には神帽、神衣、太鼓などがある。

七、ヘジェ族のシャAMAN教

ヘジェ族のシャAMANには専門的に治病するバドランシャAMAN、小病を治療するフリランシャAMAN、瘍疫を治療するデスクシャAMAN、靈魂を駆逐するダクストシャAMAN等の詳細的な分類がある。

ヘジェ族シャAMANの主な機能には、①病気の治療、②鹿神を祭っておどり、村の人々の災厄を防ぐ、③他人のために子を授かるように神様に祈る、④死者の靈魂を冥土に送る、⑤他人のために吉凶をうらなう等がある。シャAMANは病気を治療する時に神歌を歌って諸神の名前を次々に呼んで迎える。神様の名前はショリミック神、ボブグ神、スリサリク神、チャに神、スング神、トル神などのいろいろな呼称がある。

ヘジェ族のシャAMANの祭具には、刀、杖、神衣（靴、手袋、靴下、ズボンなどを含む）などがあ

り、主な偶像には木で作った虎、熊、魚、鳥などがある。その外、石で作ったジョルマパという祖公神とジョルママという祖母神の偶像がある。

2. 研究の動向

日本ではシャマニズムの研究は70年代に至って最も盛んとなったのに対して、中国のシャマニズムの研究は80年代から最も活発になってきた。中国では80年代からシャマニズム研究の論文は膨大な量にのぼるとともにその研究内容も多岐にわたった。中国のシャマニズム研究の顕著な成果としては、秋浦氏監修の『シャマン教の研究』①が出版された。既に『シャマン教の研究』にはシャマン教の理論的枠組が論じられているところがあるが、さらに編纂者は宗教学的視点をを用い、唯物論的研究方法を導入しながらシャマン教の性質は原始的、自然的な多神教であると指摘した。『シャマン教の研究』の記念碑的な成果は中国の各民族のシャマン教の歴史的発展を全体的、体系的に把握したことである。そのほか論文集『シャマン教文化の研究』は遼寧人民出版社より出版された②。ボヤンバト氏の『モンゴル族のシャマン教概要』は内蒙古文化出版社よりモンゴル文で出版された③。その他、民俗学者鳥丙安教授は『神秘的なシャマン教の世界』を上海文芸出版社より出版する予定であり、筆者と趙光遠氏とが共同で監修した『古いシャマン文化』は今年の年末に出版される予定である。

近年以来、中国ではシャマニズムについて研究論文が多く、研究の分野と視角も拡大している。宗教学のみならず、隣接の人間諸科学の視点からシャマニズムを研究する学者が増えているのは中国シャマニズム研究の主な傾向である。

口承文芸学の視点からの研究論文は「シャマン教と満族の口承文芸」(季永海、趙志忠、1989)④、「アルタイ語系各民族の叙事文学とシャマン文化」(郎桜、1988)⑤、「シャマン文化の視座から『イマカン』を見る」(徐昌翰、1988)⑥、「モンゴル族シャマン教の巫祝伝説の歴史的発展」

(色音、1988)⑦、「『ニシャンシャマン』とシャマン文化」(宋和平、魏北旺、1988)⑧、「ホルチンシャマンの詩』について」(劉建国、1989)⑨など多数にわたっている。

歴史学の研究方法でシャマニズムの現象を分析した論文は「モンゴル族のシャマン教と唐王の東方への征伐」⑩、(程迅、1988)「『ニシャンシャマン』の歴史的性質を語り論ずる」⑪(孟慧英、1987)、「シャマン教の変遷及び衰退」⑫、(伍韜、1981)「モンゴル族のシャマン教の変遷」⑬(蔡志純、1988)など多数にのぼる。

近年以来、シャマニズム研究においては、比較思想学の方法を導入してシャマニズムの研究を深化させ、北方少数民族のシャマニズムと南方少数民族の民間信仰ないし少数民族のシャマン教と漢民族の巫術との比較研究もよく展開されている。張云氏の「チベットのボン教と北方シャマニズムの比較研究」⑭(張云、1988)、賀靈氏の「シボ族の『シャマンの歌』と満族の『ニシャンシャマン』」⑮(賀靈、1988)及び「巫教とシャマン教」⑯などが比較研究の領域では注目されている。

哲学の側面からシャマニズムの現象を研究した論文も少なくない。こうした研究にはシャマン教の中から人間の思惟と哲学の起源をつきとめようとするウランチャップ氏の論考(ウランチャップ、1986)⑰、モンゴル族の哲学世界観の萌芽がシャマン教の中に成長をとげていたという観点を主張した筆者の論文(色音、1989)⑱、シャマン教の性質をマルクス主義哲学の立場から把握しようとする劉建国氏(劉建国、1981)⑲の論考などが注目されよう。

シャマン教の歴史と現状を総体的に把握してきたことも近年中国のシャマニズム研究の特色の一つとして挙げることができる。その中にはマンドルト氏の「中国の北方民族のシャマン教」⑳(マンドルト、1981)、岳青氏の「中国のシャマン教」㉑(岳青、1981)、メリゲンディ氏の「ダウール族の宗教信仰」㉒(メリゲンディ、1981)などの論文がある。その外、シャマン教そのものを一般的に紹介しようとする方振寧氏の「エベンキ族の

シャマン教」⑳(方振寧, 1985), 李現国氏の「古いシャマン教」㉑(李現国, 1983), 蔡家麒氏の「オロチョン人の原始信仰と崇拜」㉒(蔡家麒, 1983), 孟志東氏の「オロチョン族の宗教信仰の現状」㉓(孟志東他, 1981), 筆者の「モンゴル族のシャマン教」㉔(色音, 1987), 伍勒氏の『シャマン教における薩滿について』㉕(伍勒, 1982)などは注目すべきである。

シャマン教の行事, 祭具, 儀式などの具体的な問題を深く探究している成果の中には栄麗貞氏の「モンゴル族のオボ祭り」㉖(栄麗貞, 1989), ナムジラ氏の「モンゴル族のオボ祭りについて簡単に論ずる」㉗(ナムジラ, 1988), 金宝忱氏の「シャマン教における繩の崇拜」㉘(金宝忱, 1989)などの多くの論文がある。そこでは中国のシャマニズムの研究を具体的分析研究の地平へと導く作業を行うようになっている。

註

- ①秋浦監修：『シャマン教の研究』, 上海人民出版社, 1985年5月版
 ②富育光監修：『シャマン教文化の研究』, 遼寧人民出版社, 1989年版
 ③ボヤンバト：『モンゴル族シャマン教概要』, 内蒙古文化出版社, 1985年2月版

- ④『中央民族学院学報』, 1989年1期
 ⑤⑥⑦⑧⑨『民族文学研究』, 1988年4期
 ⑩『黒龍江民族研叢刊』, 1989年1期
 ⑪『黒龍江民族研叢刊』, 1989年4期
 ⑫『中央民族学院学報』, 1987年5期
 ⑬『社会科学戦線』, 1983年3期
 ⑭『世界宗教研究』, 1988年4期
 ⑮『西北民族学院学報』, 1988年5期
 ⑯秋浦監修：『シャマン教の研究』
 ⑰『内蒙古社会科学』, 1986年6期
 ⑱『内蒙古社会科学』(モンゴル文版) 1989年2期
 ⑲『世界宗教研究』, 1981年4期
 ⑳『社会科学輯刊』, 1981年2期
 ㉑『世界宗教資料』, 1981年1期
 ㉒『内蒙古社会科学』, 1981年3期
 ㉓『人民日報』(海外版), 1985年12月23日
 ㉔『新疆日報』, 1983年1月2日
 ㉕『中国少数民族』, 1983年6期
 ㉖『内蒙古社会科学』, 1981年5期
 ㉗『中国社会科学院研究生院学報』, 1987年5期
 ㉘『内蒙古社会科学』, 1982年2期
 ㉙『中国少数民族』, 1989年4期
 ㉚『民俗研究』, 1988年3期
 ㉛『黒龍江民族叢刊』, 1989年1期

余 滴

モンゴル族の紀年

モンゴル族の紀年の方法は二重の周期, 即ち十干と十二支に基礎を置いている。十二支はアルバンホヤル・ジル(即ち十二年)から成り, それぞれ動物の名が冠せられている。それは,
 ①フルガン(鼠) ②ウケル(牛) ③バルス(虎) ④タオライ(兎) ⑤ロー(龍) ⑥モガイ(蛇) ⑦モリン(馬) ⑧ホニン(羊) ⑨ベイン(猿) ⑩タヒア(鶏) ⑪ノハイ(犬) ⑫ガハイ(豚)である。

これらの動物は十二年の各年順に用いられるが実際の紀年としては短かすぎるので第二の十年を一期とする周期と組合わせられる。この周期は五元素によって名称を附せられている。即ち, モドン(木), ガル(火), シロイ(土), ティムル(鉄), オスン(水)である。このそれぞれに男性及び女性の接辞, エレ及びエメを附している。これが普通に使われる紀年法である。
 (色音)